

## おもたいとびら

「ほな、あいちゃん。また明日なー」

「おー、学校でなー」

お昼前。古ぼけた家の前で、あたしはみんなに手え振ったつた。

11月のわりに、吹いてる風がぬくくてええなあ。あんま強い風やと、家が倒れるんやないか思てびくびくしてまうからな。

そんなこと考えながら見送ってたら、いきなりみんな集まって、ヒソヒソやってん。なんや？ 思たら、

「っせーの」

「ヨヨ誕生日、おめでとなーっ!!」

「ごっつ大声で 道端で散歩してるおはあちゃんが笑てるやんか。」

「あはははは、おおきに、みんなおおきになあ」

あたしは苦笑いしながら、玄関のとびら閉めたつ

た。顔がゆるんでもうてんの、自分でわかるわ。あつちのみんなに会う前に、洗って戻しとかなあかんな。

\*\*\*\*\*

玄関のとびらにカギかけて、あたしは家ンなか見回した。

みんな、びつくりしてたなあ。ほんま、古い家や。いままでパーティやってたテーブルといすが、部屋にまるつきり似合つてへんわ。

ま、しゃあないんやけどな。

ここは、マジヨリードさんが日本に来てたとき建てた、MAHO堂になるはずの家やつたんだから。

去年のあたしの誕生日に、ハナちゃんがこのMAHO堂通つて大阪に来てもうて。マジヨリードさんと一緒に探すんで、ここのカギもろて。それからあたしは、ここに入れるようになったんや。

あれから、もう一年か。学校のみんなには秘密にしとつたんやけど、家はおじいちゃんおるし、たまにはここで遊んでもええかもしれへんな　ん？

カチャ、カチャ

なんや、この音？ 水でも出しっぱなしにしてもうたかな？

「あいちゃ〜ん、お皿はどこ片したらええのん？」

つて、ちよつと待ちや？

台所まで走って行ったら、背えの低い子がお皿洗ってた。もみじ色のきれいなミニスカートにセーター姿なんに、泡飛んでも気にせん、ちゅう感じでエプロンも着けんと。

「な、なんでまだおるんや!？」

くるつ、と振り向いたひょうしに、丸いメガネがちよいとズれてん。中学で友だちになった、咲ちゃんや。

「なに言うてんねや？ 後片付けに決もてるやん。

ああ、食べ物ぎょうさん残つてもうたから、タツ

パ詰めといたで。持つて帰り。それより、皿やどこしまうん？」

鼻の頭に泡ついてる。メガネかけ直したとき、ついたんやるか。

ぼけつとした顔でこつち見てる咲ちゃんから目えそらして、あたしは、思わず頭おさえたつた。

「昼までに終わらせなあかん、て言うてた誕生日パーティなんに、ちよい遅なつてもうたやん？ せやけど、みんなで手伝つ言つたら気にするやる思てなー、あたしだけ残つたんや」

せや。咲ちゃんは、こういう子なんや。そやからすぐ友だちなつたんやけど　ああ、もうじきみんな来てまう。なんとか、なんとかせな　!!

「いや、ほんま別に片付けんでも、この家はあたししか使わへんし、明日でもええくらいい」

そう言つた瞬間、しまった! と思うた。咲ちゃん、目の色が違てる。

「なーに言うてんの! みんな手伝つ言つてたんに、

5 おもたいとびら

自分の誕生日パーティーひとり準備したんはどこの誰や!? この上あと片付けまでさせんちゅうなら、いっぺん根性叩きなおしたらな」

言いながら、洗ってた包丁持って腕まくりしてん。まだキレてへんけど、こらヤバいっ!

「わーっ! わかった、わかったからそれ置いてんかっ!!」

むすーってしてた咲ちゃん、ため息ひとつ吐いて、なんとか包丁手から離れたわ。もうじゃあない。あとは、バレンこと祈るしかあらへんわ。

\*\*\*\*\*

台所の脇にある、ちいちゃな廊下の突き当たり。そこに、とびらあるわ。ほかは古い日本の家なんに、こだけ洋風になってん。

あたしは、そのとびらによっかかって、向こうの音聞いてた。

咲ちゃんが見たら、なんや思っやろな。間取り考えたら、このとびらの向こうは外のはずなんやから。

コンコン　　コン、コンコン

何度かとびらノックして、また向こうの音聞いて。そのうち、あたしは笑わらてしもた。咲ちゃんがいまここに来たら、説明なんてでけへんわ。

「おい、誰がおらへんのか?」

呼んでも、とびらの向こうはしーんとしてる。いっそ今日はこのまんまやったらええのにな。

このとびらの向こうは、MAHO堂。美空町のMAHO堂と、ももちゃんのいるアメリカのMAHO堂や。

ハナちゃんが大阪来たときに、3つのMAHO堂のとびら、みんなつなげてしもて。それからずーとそのまんまになっとなのや。

とびらはあたしらには開けられへんけど、向こう

の声だけはいつでも聞こえる。そやから今日はとびらの前集まって、あたしの誕生日パーティーやるはずやった。

「まさか、咲ちゃんが残るなんてなあ。考えてへんかったわ。はよみんなに知らせんと」

思わずこぼしてもうてから、またとびらノックしようとしたら、

「うひゃああっ!?!」

素っ頓狂とんきやうな声が台所から聞こえてきたわ。な、な、んや、いつたい!?

\*\*\*\*\*

「あ、あんた、誰や?」

台所に戻ってそれ見たとき、あたしはそのまんま逃げよか思ったわ。

咲ちゃんが指さしてる先で、見たことある大きなお団子ふたつ、揺れとつたんやから!

「へへへ。どうも、春風どれみッス」

それも、冷蔵庫から半分からだ出して。

「ど、どれみちゃん!? ちよい待ちや。あたしは今までとびらんにいたんやで!?!」

お団子の間で、目えが泳いでる。もう、しゃあないなあ。

あたしはほかんとしてる咲ちゃん押しつけて、制服のブレザー着たどれみちゃんを冷蔵庫から引っ張り出した。

「ん、それがねえ。とびらはとびらなだけでさあ」

そのまま、台所のイスに座らせたつたけど、な、んや、歯切れ悪いなあ。

「ええから、正直言い?」

どれみちゃん、黙つてうしろ指差したわ。その先見たら、いいっ!?!

「れ、冷蔵庫の背中が抜けてんっ!?!」

冷蔵庫の中に入ってた思たら、ちゃうわ。冷蔵庫

のドア、こつちでもあつちでも開いてるやん!?

「いや、あいちゃん来るまで、ちよつとなんか食べよつか、って思ったただけなだけどき。開けたらすぐドアが見えるから、押ししてみたら こつちやつちやつて」

あ、あはは、あはははは ふたりで顔見合わせで笑てしもた。お互い、顔ひきつらせながらちやつてど。

「どれみちちゃん、だいじょうぶうう?」

ああ、冷蔵庫からまた、よお知つてる声が聞こえてきたわ。

「はづきちゃんやな? とりあえず、この冷蔵庫閉めんといて。帰れなくなるかもしれへんから」

言つてる間も背中に視線感じてるけど、振り向けへん。黙つてるのがよっぽど恐ろしわ。

ああ、こんなん、どない説明したらええ、つちゅうんやつ!!

「え? あ? あ、あいちゃん、これって??」  
考えてる間に冷蔵庫からはづきちゃんが、ゆつた

りしたスカート足に巻きつけながら出てきてもつてるし。もう、しゃあないなあ。この家はびつくり屋敷、あちこち仕掛けしてある、で、ええか。よつしや。

「い、いやあ、咲ちゃん。実は、この家なあ、でつきるだけ笑つた顔で振り返ろうとしたとたん、

「NO!! なんデ? どうして、トイレの向こうが和室なのヨお!?!」

あ、ああ、あああああ——また聞いたことある声やあ。もう、勘弁してんかあ

\*\*\*\*\*

「あー」

「ええと」

「うーん」

出てきてもうた3人、台所のイスに座らせて、あたしはその前でへらへら笑てた。 つちゅうか、笑うしかあらへんわ。もう。

背中のみんな、顔つき合わせて考え込んでるわ。ああ、頼りにしてるんやから、はよ考えてえな、みんな！

それにしても、咲ちゃん、さつきつから流しの前に立って、ぼーっとしとんなあ。大騒ぎしたら縛らんとあかんか、て覚悟しとったんに、こつなると、声もかけられへん。さあて、どないしよか  
「正直に言うしかないんじゃない？ わたしは、信じてもいい子だと思っけど？」

そやなあ。咲ちゃんは、あたしがおんぶちゃんと友だちなんも知っとんのやし、

「まあ、さよつとへくらくらい変なことあつても、わかってくれ」

ちょい待ちや。

咲ちゃんの顔、『ぼー』から『ぼかーん』になつとんで？ それに今の声、どつから、なんやとあつ！？

「目玉が落ちるわよ、あいちゃん」

台所の流しの上、おもつきし開いた窓から、ぴよ

こん、て髪のたばがゆらゆらしとるわ。

「お、おんぶちゃんまでやて！？」

窓枠に足かけて、こつちに飛び込んだきたんは、ほんまにパンツ姿のおんぶちゃんや。せやけど、なんや？

「今日は仕事の打ち合わせやから夜に、って言うつたんに、それに、なんでみんなと違つとつから来てんねや??」

転びそうなるを、あたしの肩つかんで立ちながら、「仕事ならちゃんとしてるわ。だってこの向こうは、マジヨルカの事務所だもの」

言うてるおんぶちゃんの言葉、遠くから聞こえてくる見たいや。なんなんや？ なんでこないあちこちポコポコ繋がって、ん？

おんぶちゃんの肩に、見たことあるもんが乗つかつてるやんか、て、んなアホな!!

「おんぶちゃん、なんで口口連れてんねん!!」

むらさきのちいちゃんやんが、ふわふわ目の前降りて







そう言うて、ようやくあたしの口から手え放したけど、今度は顔が近づいてきたわ。

「そんなんしつけやないわ。あたしは認めへんで。あいちちゃん、あんたのやつてんの、いじめ ん？」

あたしと咲ちゃんの顔の間に、いきなり青いもんが浮いてん。ミミが、両手広げて、あたしの顔の前に

そしたら、その向こうの顔が、いきなりリスみたいな笑い顔になった。

「ミミちゃんに免じて許したるから。ちゃんと話聞いたり。な？」

咲ちゃん、そう言うてコンロの方行つたわ。フライパンのつけて、油しいて。

目の前にいたミミは、いつのまにか手に乗つたて、あたし見上げてる。なに言おうか、迷ってるつちゆう感じで、て、なに言おうか？ ちょ、ちょい待ちや。まさか！

「咲ちゃん。あんた、ミ、ミミの言うことわかるん

か!？」

背中の方でおんぶちゃんたちが、息ころしてあたしら見てんの、そんなときになって気がついた。

\*\*\*\*\*

「咲ちゃん」

コンロの前でフライパン振ってる後ろまで行って、おんぶちゃんが言った。

「あなたは、なにも聞かなくていいの？」

炒めなおしたケチャップライス、皿に盛つて。薄焼き卵をぱっぱつ、て焼いて乗せたつて。そんな咲ちゃんが、あたしたちをちらつ、と横目で見て、

「これは夢や」

深めのフライパンに油入れて、火い強おしてから、こつち向いたつた。

「こないなどこにおんぶちゃんが居るんも、あいちちゃんの東京の友だちがいきなり来てるんも」

「わたしはニューヨークだよ」

後ろからもちゃん口はさんだけど、

「ニューヨークでもエジプトでもなんでもええわ！

ンなどこからいきなり来てるんも、みんな、あ  
たしが見てる夢だからや」

まるつきり関係なしや。

「せやから、聞くことなんてなんもあらへんて」

そう言ってる間も、冷めたから揚げを揚げなおし  
てる。ほんま、かなわんなあ。

あれ？ おんぶちゃんがニコニコしながら戻っ

てきて イスに腰かけてもった？

気がついたら、立ってんのあたしだけや。みんな  
イスに座ってるやん。テーブルの上には、さっきタッ  
パ入れた言った料理が、湯気たてておいてあるし。

「さあ。残り物で悪いけど、これでまたパーティで  
けるやろ？」 ほな、な」

あたしの脇を、なんか通り過ぎてった。

みどりのバッグしよって、咲ちゃんが玄関に歩い

てってる。とっさにあと追いかけたら、いきなり振  
り向いてあたしの目えじつと見つめてきた。

「ええか？ これは夢や。あたしの夢なんやで？」

せやから、あたしがこの玄関出たら、もうこん中、  
いつも通りに戻っとんねん。 ええな、あいちゃ  
ん？」

言いながら、部屋の中見わたしてる。向こうが見

えてる、冷蔵庫と、流しの窓と、トイレのドア

あたしがなんも言えんで、ただ口を開けてたら、

「待って！」

っちゆう大きな声。

「あいちゃんのこと、お願いだよ」

どれみちゃんがイスから立ち上がって、じいっと  
こつち見つめてるわ。

「せやから、夢やて言つて」

どれみちゃん、真っ直ぐこつち見てん。4年も見て

きた、ほんまに本気顔や。あたしはのどが詰まっ

てもうて、もう息がでけん。

「あたしたちのことは夢でいいから。あいちゃんのこと、ぜったいお願いだよー!」

咲ちゃんが、ほっぺかいてテレながら、こっくりうなずいたった。

ふう。あたしも、やっと息がでけるわ。

台所のテーブルでも、みんながなんや話し出してる。ふう。一時はどうなるか思たけど

「ほんま、ええ子やなあ あいちゃん」

なんや、思て咲ちゃんの見えたら、まじめな顔しとった。さっきのどれみちゃんに、負けへんくらい。

「今日のことば夢や。せやけど これから、どないする?」

はっ、て息のんだまま、あたしは、またのどが詰まってもうた。

「来年の誕生日は、夢やないとええなあ ほな、な」

ゆっくり閉まってく玄関のとびら見ながら、あたしはまるで、閉じ込められた気いになってもうた。

\*\*\*\*\*

「それじゃ、そろそろ終わりにしようか」

テーブルの料理もなくなつて、ももちゃんの目がちょいトロ〜ンとしてきたころ、どれみちゃんがジュース入りのコップ上げて、最後の乾杯したった。

なんやいろいろあつたけど、みんなに会えて、ええ誕生日やったな。来年は んにゃ、いまは考えんと」。

あたしは、ほんま眠そうなももちゃん、トイレに押しこめて。

「こんどは、どこが開くかな?」

なんて言うてるどれみちゃんたち、冷蔵庫に入つてくんを見送つて。

「それじゃ、次はクリスマスだね。今年はみんなに会うために、ちゃんとお仕事しなくっちゃ」

そう言うおんぷちゃんを流しの上に乗せてから、あつ、て思つて肩見たった。まだひとりおるやん。

「どないしたらえんやろ？ いつまでもここにお  
るわけいかんしなあ」

肩の上からは、ミミが見返してくれてん。

結局、窓やら繫げたわけ教えてくれへんかったし、  
まだ話したいんやけど、帰れなくなっても て、あ  
ん？ いきなり、おんぶちゃんがミミ持ってつても  
うた!!

見上げたあたしの前で、いたずらっぽい笑顔がこ  
ぼれてん。なんや、いったい??

「みんなの前じゃ言えなかつたけど 実はね、今  
回つなげるようにお願いしちゃったのって、ロロだっ  
たの。どうしても、わたしに会いたいから、って言っ  
てミミ誘ってね。

だから、わたしのところからなら、ロロたち帰せる  
のよ」

な、なんやとおっ!!

ちゆうことは、や。ミミ怒って、咲ちゃんにバラ  
してもうて、それ全部

「我慢できないのは、あいちゃんだけじゃないって。  
こ・と・じ・ゃ♡」

ウインクしながら向こうに飛び込んだおんぶちゃ  
んの後ろで、窓が閉まってくわ。

「ちょい、待ちやおんぶちゃ ツツー！」

あたしの指が、窓にはじかれたとたん、トイレと  
冷蔵庫がバタンツつちゆう大きな音で閉まったった。

つつたく、どいつもこいつも つつー！

「だあ〜っ！ なんでこないなときばつか重いんや、  
このとびらはっつ!!」

—おしまい—